



## 保護されない社会

東区支部 村上弘則

とりとめもない雑感を述べようと思う。内容については気に止めることなく、さっさと読み飛ばして戴ければ幸いである。

もう数年前となるが、私が米国に2年ほど留学していた時に話は遡る。当時、私は虚血性心疾患の実験をすべく、米国テキサス州の北テキサス大学医学部の生理学教室に在籍していた。教室には種々の国の出身者が在籍し、さすが米国と感心する国際社会であった。東洋系は私(日本)と院生の金君(韓国)と李君(台湾)、中国出身の虹さん、他は、南アフリカ、カナダ、ベネズエラ、プエリトルコ、インドなどであった。このうち、白人は南アフリカとカナダ出身の男2名。ベネズエラ、プエリトルコの2人の女性はスペイン語を早口でまくしたてる典型的spanish。インド人のStrete博士は年もとっていたが、米国生活も長いという人で、自分の研究を大事にする紳士であった。

さて、いきなり本題に入る。わたしが述べたいことは、我々は守られているか?という問題である。米国の話はそのための題材にすぎない。私が在籍していたのは大学なので、もちろん露骨な排除など微塵もないし、身分は保証されていた。しかし、自分達の存在は随分あやういところに乗っていると常々感じていた。その第一は差別である。英語を母国語の様に話す、ベネズエラとプエリトルコの2女性は常に、差別を意識していた。我々、東洋系は英語を母国語としないこともあり、洗練された差別は分からないものの、ニュアンスは常に感じとっていた。差別感のないのは白人男性2名のみで、彼らは実に屈託がなかった。私のラボには黒人の優秀な助手がいたが、彼は常に白人社会にあっては控え目であり、白人社会も彼の琴線に絶対触れ

ることはなかった。大学の様な知的社会ではない一般社会では、差別はもっと露骨で、ロサンゼルス暴動の火種はそこらじゅうにあったと思う。

私は2年契約で日本に帰る事が決まっていたので、あっさりしていたが、在米を希望する外国人達はよく働き、よいデータを出し、自分の地位を守ることに必死であった。彼らの俸給の多くは教授の獲得する研究費により賄われているため、教授に認められる事が非常に重要なことを彼らは知悉していたし、ひいては次のステップにつながることも常識であった。だから、私の教授がNIHからの研究費獲得に失敗して約3ヵ月間、あらゆる研究、指導を無視して、新しい研究費獲得のため部屋にこもった時、誰一人文句を言うものはいなかった。しかし、よりよい待遇が得られれば、となりのラボにあっさりと移る場合も珍しくないという事であった。一方の白人社会にあっても競争は実に、熾烈であった。教授達は虎視眈眈と次期主任教授の席を狙っていたし、より高額の俸給と、良い条件の職場を捜していた。

私達が守られているかと考える上でのエピソードは他にも色々ある。私の家内は近くの短大の外国人の為の英語講座に通っていた。そこにはそれこそ、世界のあらゆる国々から集まった人々が英語を習っていた。ある日、教師がもし、多額のお金が落ちていたらどうするかと質問したとき、警察に届ける、と答えたのは、私の家内と韓国人の友人のみであり、他の、全員は自分の物にすると答えたそうである。拾遺物に対する習慣の違いではなく、家内と韓国人の友人を除いて、警察が信用できないからと答えた点、印象的であつたらしい。

海外生活でのビザやパスポートの重要性は言うまでもない。これが我々を違法滞在者ではないことを証明してくれる。同じく、日本の在外公館も海外在留者の後ろ楯になってくれるはずである。しかし、私の日本人の友人があやうくビザの期限切れになりそうであった時や、他の様々なトラブルについて、何度かヒューストンの日本領事館に電話をしたがその対応は常に冷たく、こんなに自国民に冷淡な海外公館があってもいいのかと、その度に、憤慨したものである。

誤解のないよう付け加えるが、以上のエピソードは留學生活のほんの1ページであり、大部分は楽しい日々であった。要は、海外にあっては我々は守られていないことの証拠として述べたにすぎない。私が、留学生であったという事情のみに限らず、全ての人はある程度守られていず、自分自身を守らねばならない部分が非常に多い。裏を返せば、自分の自由になる部分が多いことになるのであろう。帰国後私が一番感じた事は、自分は守られている。多少窮屈でもその中にいれば最低の所は保証されていることであった。働かなくても失職することはないし、病気をしてもなんとかやっていける。他人は自分に悪いことはしないだろうし、政府も、会社

も、警察も最終的には悪いことはしないであろうし、最後には守ってくれるだろう。そんな幻想が現実感をもってしまっている様に思われる。昨年、米の部分開放が決定されたが、その後の盛り上がりは今一つであったことは記憶に新しい。これなど、この幻想の効果の最たるものの様に思える。受験戦争は年々熾烈になってきているようだが、これとても、より保護された階級へ子供を入れたいという親の希望がそうさせるのであろう。少しく自由はないが保護された社会と、自由はあるが保護されていない社会との良し悪しを判断するつもりは私にはないし、できもしない。但し、日本は国際社会という守られない社会の中へ、嫌でも出ていかなければならないようだ。この軋轢は我々の生活のすみずみまでやがて入り込んでくるであろう。その時我々はどう対応するのだろうか最近思うことが多い。徹底した保護のもとで成長する子供達の行き着く先には守られない社会が待っていることも、どうやら現実らしい。

日本のほとんどの医師は保護された社会で育ってきた。しかし、やがて近い将来、われわれ医師にも本当に保護されない社会が浸透してくるだろう。その時、我々はどう対処するのだろうかとも思っている。 (天使病院)

